

連載●5

認知症の人の終末期を考える

認知症者のケアと安らぎ

8.9月は 島薙 進 教授

●東京大学文学部・
大学院人文社会系研究科

(しまぞの・すすむ) 東京大学大学院人文社会系研究科教授(宗教学)。筑波大学哲学思想学系研究員、東京外国语大学助手・助教授を経て、東京大学文学部(大学院人文社会系研究科)宗教学宗教史学科教授。1996年シカゴ大学客員教授、1997年フランス社会科学高等研究院招聘教授、2000年チュービングン大学の客員教授、2006年カイロ大学客員教授。



●個の尊厳といのちの循環の死生観

まださほど進んでいない段階の認知症の人が、自分の症状に困惑している姿が忘れない。私は職場の、また近い親族の一員が、10年余りの認知症の進行を経て60代前半、70代前半で世を去っていったのを見送ったことがある。従来できていたことができていないのに、何とかできているように取り繕おうとしている。そこに少し真剣さと焦燥感が感じられるのだが、それも次第にいい加減になっていく。周囲はとても悲しいのだが、本人は必ずしも苦悩で押しつぶされるというふうではない。

その人に個人として敬意をもっていた時のことと思い起こされて見ているのがたいへんつらい。無力感による苦悩が垣間見られるのだが、その苦勞の重みもなくなっていく。すでにこちらからの思いが届きにくい向こう側に、その人の本体は移ってしまったのかと疑われた。世話をする側は個の尊厳の喪失の悲しみで押しつぶされるほどかもしれない。だが、ある個人がこの世離れしていくということの中には安らぎがないわけでもない。つまり、苦悩を通り越した平安に向かっていくプロセスとして受け止めることもできはしないか。少なくとも自分にそう言い聞かせようとしたことが私にはある。

深沢七郎の『楨山節考』では生命力を保持し続けてしまうことに打ち克つ老女が描かれている。姥捨山に自ら身を置こうとする凄絶な意志と緊張感はほとんど十字架にかけられるイエスのようだが、それは目覚めようとする根強い力を表現してもいる。個としての尊厳を保ち、あくまで後続世代のために貢献する高齢者は、も

ちろん最大限の敬意に値する。そうなりたいものだが、同時に個の輪郭を失い枯れていく様子を通して平安を表現し、次世代に伝えていくという道もあるのではないだろうか。

30代の頃、当時80代になる伯父の、大学時代の同期会に数年間つきあわされたことがある。こまめな伯父だったので、同期会の世話役を務め続けたのだ。伯父が86歳で死んだ後も数年間続き、伯父の遺族の代表として何度か出席した。伯父には子どもがいなかったので、世話になった私がつきあわざるをえなかつたのだ。

その集いは、同期会メンバーとその夫人、さらに少し年少の関係者が集まる集いとなり、最後は同期会メンバーは2、3名になったのだが、それでも細々と続いていた。その会ではほとんどおたがいの会話もない。集まって挨拶らしきものをし、静かにじっとすわり、食事をし、別れていく。それでも会は開かれ続けていた。私にはそれは、死者の世界へと向かって静かに歩いて行く道のりのように感じられた。同期の人びとは向こう側にいるのだが、同期会が開かれるときにはその場に来ているのではないか。

もし、次第に意識や記憶が衰え、からだの働きも枯れていって、やがて死の安らぎに向かっていくことをそのように感じ取れるとしたら、老いていくことをだいぶ受け入れやすくなるのではないか。かつて「ホトケ」となり「先祖」となると考えられていたことの中にはそのような安らぎとしての老いと死のイメージも含まれていたのではないだろうか。その頃、人は「認知症」を今よりももっと柔らかく受け止めることができたのではなかつたか。

地域社会で行われて来た伝統的な祭の中では、「先祖」や「鬼」がもどってきて、生者とともに交歓する状況を演ずるものがある。たとえば、奥三河で「花」とよばれる冬祭（「花祭り」ともよばれた）では、若者たちによる舞に続いて、鬼が出て来てこの世の男たちとともに踊る場面がある。そこではこの世とあの世が交じり合って、たいへん賑やかな祝祭の場が具現するのだが、その鬼は死んで行った先祖の象徴と見てもよいだろう。この世で次第に影が薄くなっている人たちが、向こうの世界で新たによみがえり、こちらに帰ってきた—そのように感じられるものだ。

死を待つだけの「むだな」時間を過ごすかに思える認知症の人たち。だが、そこで過ごされている時は、大いなる安らぎに向かういのちの循環の、大切なリズムの一環と見ることもできるのではないだろうか。少なくとも近代以前の人たちには、そのような眼差しを身につけていた人が多かったのではないか。いやいや、現代においても、認知症の方々の世話をしているうちに、私たちはそのようないのちのリズムの感覚を取り戻すものなのではないだろうか。

終末期をめぐる医療措置について、現代人は難しい選択に迫られる。胃ろうを設けるべきか、設けた胃ろうをいつはずすのか。認知症の人の身体疾患についてどこまで病気治療をすべきなのか。食べようという意志を示さない人にどこまで食べさせるための支援をすべきなのか。肺炎の危険を冒してどこまで食べさせるのか、等々。倫理的判断はたいへん難しい。だが、あくまで個のいのちの尊厳を尊重とともに、大いなる安らぎといのちの循環を感じ取りつつ、認知症患者の世話をすることができるとすれば、難問に対する答えも少しなめらかに導き出せるのではないだろうか。（つづく）

（参考文献）島薦進『日本人の死生観を読む』
朝日新聞出版、2012年



「胃ろう」への家族の思い⑤

支部会報から探る

「胃ろう」を導入した家族の思い

●胃ろうで4年間笑顔が（福島県支部）

特養に入所して4年目、転倒後入院、誤嚥性肺炎を繰り返していたことから医者から胃ろうの造設をすすめられました。本人の気持ちを考えると胃ろうは嫌だったかも知れませんが造設を決めました。施設での暮らしは、体調が良いときは車イスで散歩をさせてもらったり、笑顔が見られたり、胃ろうにして良かったと感謝しています。

●在宅介護を続けていきたい（福岡県支部）

発病して13年経つ68歳の夫を自宅で介護していて現在は寝たきりです。昨年7月に胃ろうをして痰の吸引等24時間ケアを続けてきました。2月からは月の半分は自宅で過ごしています。以前より随分と楽な介護になったなど実感し、できる限り自宅で介護を続けていたらと思っています。

●遠距離介護をして（大分県支部）

要介護5の86歳の実母を、13年間在宅介護をして今年の1月に看取りました。

最後の1年4ヶ月は胃ろうをし、寝たきりとなりましたが、住み慣れた家で私と2人で静かに穏やかに暮らすことができました。言葉を発せない母でしたが、私の声かけにいつもニッコリ笑ってくれ、何よりも私の喜びであり、私自身が癒されていたのだと今、感じています。

「胃ろう」を導入しなかった家族の思い

●延命治療は望まない（高知県支部）

96歳の母は、食べる量が極端に減って入院し、点滴が始まりました。家族としては100歳まで生きてほしいのです。でも自然に生きてほしいのです。私たち夫婦は胃ろうをしないという選択をしました。自然のままで見送りたいと思ったのです。食事は難しくてもなぜかコーヒー味の豆乳は飲むのです。母はほとんど最期まで毎日のように愛する息子から豆乳を飲ませてもらいました。

息を引き取ったとき、少しも苦しまずに、眠るように、ごく自然のままで穏やかな死を迎えることができました。

会費自動引き落し申込書

ホームページからダウンロードできます [家族の会](#)

ゆうちょ銀行の会費自動引き落しの登録者数は946名（6月末現在）です。たくさんのお申し込みありがとうございます。

登録がまだの方は「家族の会」ホームページから申込書をダウンロードできますので、ぜひお申し込みください（2013年度会費からの引き落し）。

●申込手順は下記のとおりです。

【申込手順】

- ①トップページ「組織」タブの「会員の方へご案内」をクリック
- ②「申込書様式のダウンロード」（PDF）をクリックして申込書をプリント
- ③ゆうちょ銀行口座の記号・番号、名義人などの必要事項を記入、捺印
- ④2013年1月末日までに「家族の会」事務局あてに郵送

会員さん からの お便り

「認知症」には違和感？

京都府・Kさん 64歳 女

ベストセラーになっている『大往生したけりや医療にかかわるな』と『人間の往生』を読みました。前者では「認知症」という呼び方に対する疑問、後者では「患者様」という言い方の持つ危険性の指摘がありました。差別語は良くありませんが、「差別しない」は当然としても、言葉だけに過敏になったり、過剰に丁寧な表現がまかりとおるものもどうかと思っています。

「患者」や「利用者」に「様」をつける表現はなりをひそめたようですが、「認知症」は公用語になっているので、私もいささか違和感を持ちながらも日常的に使用しています。でも、時々「呆け」を使ったほうがピッタリこともありますね。

明日は我が身と思いつつ

山形県・Nさん 79歳 女

6カ月の間に姑、義姉、主人を取り終え、4月に七回忌を終えました。

実家の義姉が認知症になり老健でお世話になっています。子供のいない人なので、ひとりで生活もできません。私は2時間近くかけ電車で月1回、面会に行っていますが、私を忘れることなくニコニコして名前を呼んでくれるのでホッとして安心して帰ることができます。

又、横浜にいる主人の伯母も認知症で娘

とは行き来なく、近所の人達に支えられ生活していますが、私のところが実家のため、「タクシーで帰るからね」と電話が来るたびハラハラドキドキです。

明日は我が身と思いつつも、元気な今の私は、人の事を少しでも心配していることができ、ホッしたり、感謝したりしています。

24時間サービスを期待しましたが

東京都・Tさん 69歳 女

アルツハイマー型認知症の夫（75歳）を支え13年余りになります。その間、本当にいろいろな事がありました。時にはめげそうになったり、鬼の形相で怒ったり、また、出来ないと思っていた事が出来た時の喜び。笑顔を見せてくれた時等々、一喜一憂しながら接していました。今、要介護4となり、言葉も失い歩行もままならず、車椅子での移動、立ったり座ったりが私ひとりの力では困難になり、昨年8月グループホームへ入居しました。とても辛い決断でした。これでよかったのか？まだやれるべきことがあったのではないか？入居して10ヶ月になりますが、未だその思いは晴れることはありません。

4月からの介護保険制度改定による24時間サービスを期待しました。ヘルパーさんの手助けで、また私の手で介護できるのではないかと思ったからです。しかし、私の住んでいる自治体では手を挙げた事業所がまだないそうです。

車の運転に悩んでいました

千葉県・Kさん 66歳 女

夫は71歳、前頭側頭型認知症と診断されて4年目、要介護1です。今まで一番困ったのは車の運転でした。すでに追突事故、

埠にぶつけるはあり、自転車、バイクにあわやという事もあり、気持ちの休まる時がありました。主治医から「もう危ないから車の運転はやめましょう」と言われても「いや、私は大丈夫、安全運転ですよ」と言って聞きません。「家族の会」に相談してアドバイスいただいたことを試してみたのですが、怒って「お前は！お前は！」とエスカレートするばかり。

悩んだ末、たどり着いたのが免許センターでした。専門に相談にのってくれる係の人がいて、ふたつの選択がありました。ひとつは公安委員会指定の診断書を提出し呼び出しに応じる事。ふたつめは免許センターから日時を指定して「相談したい事があるのでセンターにお越し下さい」とハガキを出すとの事。私は後者を選びました。前者は3ヵ月程かかると言われ、その間に何かが起きてはと待てなかったのです。指定された日に夫と二人で出かけ、強制的に「病気ですから返納してもらいます」で終わり。相手は警察、どんなに抵抗しても返してもらえません。

夫は未だに警察と聞いただけで恨みつらみを並べます。きっとこの事だけは忘れる事はないのでしょうか。

ちょっと可哀想かなとも思いましたが、ホッとしたのが正直な気持ちです。

言葉に傷ついています

兵庫県・Sさん 56歳 女

おばあちゃんは特養に入所して3年目です。施設に入所できてやれやれと思っている時に、おばあちゃんの知り合いの人に言われた言葉が私をとても悲しく辛い気持ちにさせます。

「おばあさんはまだしっかりしている。あんたら家族が医者やケアマネに言って書かせて痴呆老人の巣に放り込んだんや。あんな所で生活する人ではない」など、ひどい言葉を浴びせられました。その人は音楽療

法士の資格を持ってボランティアを行っているからよくわかると言っていました。

本人の問題行動などで、私は心が苦しいのに、そんな人の言葉はもっと私を苦しめます。

認知症の看取りはどうあるべき？

新潟県・Aさん 79歳 男

アルツハイマー型認知症で症状がますます進行した妻（77歳）は、要介護5でまったく寝たきりの状態です。私のことも全然わからなくなりました。

先日、入所して6年になった介護老人保健施設から、この施設では看取りは出来ませんので、その1週間前になつたら自宅に帰しますと告げられました。

そのような時にはどのようにしたらよいのか、認知症の看取りはどうあるべきかを教えていただきたいと思います。

ぼ～れぼ～れに感謝

神奈川県・Sさん 64歳 女

様々なニュースや情報と共に皆様の体験談、知恵の宝庫を拝見させていただき感謝しております。

悪戦苦闘の毎日から楽戦喜闘の日々に変えられつつあります。先生、ケアマネさん、デイの方々、ショートの方々の力をお借りして何とか介護が続けられます。



お待ちしています！

■『ぼ～れぼ～れ』へのご意見やお便りは「家族の会」編集委員会宛にお送りください。

〒602-8143 京都市上京区掘川通丸太町下ル京都社会福祉会館内
FAX.075-811-8188 Eメール office@alzheimer.or.jp

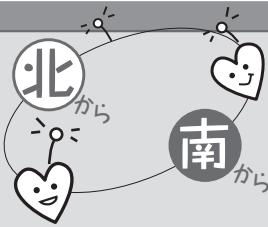
III 支部だよりにみる

介護体験

今回は
東京都

「仕事か介護か、在宅か施設か」で苦悩

東京都支部 雄川孝喜さん

東京都支部版
(2012年6月号)

●なんの病気か？

妻の様子が平成12年頃からおかしくなった。当時50歳。平成13年、脳外科病院でのCTやMRIの検査の結果「脳の血流が悪く、小さな梗塞の痕が沢山ある。脳の萎縮は見られない」とのこと、当時は認知症についての知識がなく、対応が遅れてしまったことを残念に思っている。

●認知症と診断されて…

平成14年に精神神経科に移り、詳細なテストや検査の結果「脳血管性認知症とアルツハイマー型認知症の合併症」と診断され、余命6～8年と宣告された。アルツハイマー病は重度の物忘れ病としか考えていなかった私は、「治療薬がなく、座して死を待つ残酷な病気」とあると聞かされて愕然とした。

●病気に対する本人の自覚

本人は認めたくない気持ちが強かったのだろう。医師の「どこか具合の悪いところがありますか?」という質問に「どこも悪くない」と答え、医師から「本人には自覚がないので、本人は辛くも何ともない」と言われてしまった。

しかし、眼鏡ケースの中にアルツハイマー病に関する記事の切り抜きを入れており、親しい友人には「最近、物忘れがひどく、困っている。アルツハイマー病かもしれない」と打ち明けていた。薄暗い廊下の隅で声を殺して泣いていたこともあり、本人は自覚しており一番辛かったのだと思う。

●若年性の場合の子育ての悩み

発症時、中学生だった娘は「お願いだから、昔の口うるさいお母さんに戻ってよ」と妻にすがりついて泣いたり、「私のお母さんではないと思うように努めて」と嘆き可哀想だった。中学、高校と多感な青春時代を母親が実質不在の状態で過ごさざるを得なかつたことは、人生の過酷な試練だったと思う。

●仕事を辞めて介護に専念

平成18年に要介護5になり、片時もひとりでは置いておけない状態になってしまった。発症からたった6年だった。もう限界を感じて仕事を辞めることにしたが、辞めるのが3年遅かったと思う。「ひとりでいて、怖い、寂しい」という気持ちが症状の進行を早めてしまったのではないかと悔やんでいる。

●在宅介護の限界

排泄パターンを記録し、夜中も3回ほど誘導した。夕方や夜はせん妄があり、寝てくれず、私は睡眠不足と疲労でたびたび共倒れの危機に直面した。また、一時は私の介護を全面的に拒否していた「知らない男の人が家にいて怖いのです。お願いだから一緒にいてください」と娘に毎朝訴えて困らせた。

通院が困難になったので、3ヵ月に1度の通院にして、訪問診療に月2回来てもらうようにした。夜中に何度も嘔吐して医師を呼んで点滴してもらう事態なども発生し、医療面での不安も大きくなつた。

●入所して…

発症から12年を経過した現在、妻は介護施設で生活している。まだ62歳だが立てず、歩けず、言葉も発せず、表情もほとんどない。私は一日おきに行って、介護の手助けをしながら、残された時間を一緒に過ごしている。妻は私の顔を見ると穏やかな顔つきになり、話しかけるとわかったようにうなづく。

医療と介護が分断された介護施設は「終のすみか」にはならない。若年性の場合は他の入所者と親子ほどの年の差があるので、なじみにくい。在宅での家族介護を上回るものはないと思う。しかし、症状の進行に伴い介護負担が増加して共倒れに直面してしまう場合には、家族介護の延長線上で決断せざるを得ないとも思う。

いきいき 「家族の会」まちでも村でも

山菜天ぷら会

長野県
支部

四賀地区家族会恒例の山菜天ぷら会が、5月20日に12人の仲間が参加して開かれました。早朝より山に入り、タラの芽、こしあぶら、ぎょうじゅにんにく、コンフリー、つつじの花など山の恵みが数箱の段ボールに一杯。用意したコンロで天ぷらに揚げながら楽しい会食。

つつじの花に青物を少し混ぜて揚げると色彩が抜群に揚がり、とても美味しそうになることが今年の新発見です。

青葉若葉の山懐で山の恵みの味覚を楽しみながら家族会の話が弾みました。千曲地区から特別参加の中山けいさんは「来年は自分たちの地区でもぜひ行いたい」と話していました。

感動が人を動かす

島根県
支部

支部総会後、映画「此の岸のこと」を参加者90名で鑑賞し、外山文治監督とも活発な意見交換も行いました。

参加者から「これから認知症にどうかかわっていくかを考えさせる映画で、無声であるためよけいに心に深く

入っていき感動しました」「今晚、夫と『介護』『生きるということ』について話し合おうと思いました」など多くの感想が寄せられました。映画の感動が、見る人それぞれに自分自身の課題として考えさせられたのではないかでしょうか。映画鑑賞会は大成功で、企画・運営された世話人さん方は大変喜んでいました。

電話で、訪問

宮城県
支部

支部では、介護中の会員約110名の方々に支部世話人が直接電話をして近況をお伺いする「電話で、訪問」を始めました。

この電話訪問は震災の教訓に基づき始めたもので、

平常時から支部のつながりを深めていこうというものです。

関東澄子支部代表は「日頃、『つどい』に参加できず、電話相談も遠慮されている皆さん、介護中の皆さんに悩みや困っておられることを、気軽に話していただきたい」と語っています。

みなさん、私の話を聞いてください

福井県
支部

7月14日、リフレッシュ旅行の夕食時、60代の男性から「みなさん、私の話を聞いて下さい」に続いて「私は認知症と診断され、デイのお世話になっています。今一番悩み苦しんでいることは、悪いこととは分かっているのですが徘徊をすることです。私の病気がなせ

ることと思うのですが悩み、苦しんでいます」と話されました。

「初めて、直接、認知症の方の切実な悩みを聞かされ衝撃を受けた」「苦しんでいるのは家族だけではなくご本人も…」「認知症に対する理解を深めなければ」という声がサポートとして参加した専門職の人たちから聞かれました。

国際交流委員会発 「ケアでつながる地球家族」 ■インドのジャコブ・ロイ博士がADIの新しい議長に

昨年3月のカナダ・トロントで開催されたADI国際会議で2012年度からのADIの議長が投票により選ばされました。3名の立候補者から選ばれたのはインドのジャコブ・ロイ博士です。ジャコブ・ロイ氏は医師ですが、お父様がアルツハイマー病を病み、63歳で亡くなるまで介護をされました。こうした体験からインドのアルツハイマー病協会の設立に関わり、初代事務局長を務め、後に会長となりました。

彼の夢は、世界中の認知症患者の誰でもが、尊厳と名誉ある人生を送れるようにすることであり、そのためには世界の国々が認知症をより身近なものとして情報を得、安心して暮らせる社会を創り上げることです。

2007年にはインド政府から知識普及分野で国家表彰を受けています。新議長のリーダーシップに期待したいですね。

今年3月のロンドン会議の時に「家族の会」へ、インド協会からの記念品を持ってきてくれました。

(国際交流委員長 吉野 立)



日本のブース前でジャコブ氏（中央）と（右側坂井委員、左側筆者）



今月の本人 浅沼早苗さん

浅沼早苗（60歳）さんは元小学校教員です。定年退職を前に記憶の違和感を感じ、受診し認知症の診断を受けました。夫と義母の3人で暮らす日々でしたがどう過ごしたらよいか悩んでいました。そんな中デイサービス「DAYS BLG！」を知り、通うようになりました。



壁面に木を描く浅沼さん

壁一面に描きました

得意の絵でデイサービスのみんなが過ごす部屋の壁一面に木を描きました。

今後、デイで開催予定の「幼児の遊び場」や、近隣の「保育園」「学童保育所」で読み聞か



壁面に描いた木の絵

せる紙芝居（カエルが主人公の「たかい、たかい」）を制作中です。「幼児の遊び場」では離乳食つくり教室なども開催予定です。

「介護される存在から、再び社会の一員として“働く”“役に立つ”デイサービスとして未来を感じながらチャレンジ精神を失わず」に期待し、浅沼さんの新しい居場所になっていました。



紙芝居の表紙絵

「DAYS BLG！」



スタッフのみなさん（左より森下さん、石渡さん、前田さん、高田さん）

「DAYS」は日々、「B」はバリアで障壁のない、「L」はライフで生活、「G」はギャザリングでつどい、「！」は社会に発信していくこうという強い気持ちの意味で、介護保険サービスの10名定員のデイサービス事業所です。介護保険の認可前の7月14日に訪問しました。

管理者の前田隆行さんの「すべてのことが選べ、

一緒に考え行動するデイ」への熱い思いに引きこまれました。利用予定の方のできることを頭にえがきながらいろいろな活動を模索中でした。洗車、乳酸飲料の訪問販売、野菜づくりや販売。



デイの看板作成

送迎は自宅から自転車通勤、町田の駅までや、自宅まで黒の四駆車でお迎えなど、これも選べます。生活を一緒に組み立て、新たな生き方とともに考えるデイでした。

（編集委員長 鎌田松代）

「DAYS BLG！」住所：東京都町田市金森945-1 電話：042-860-6469

情報コーナー

交流の場

千葉●9月30日(日) 午後1:00～4:00／若年のつどい→千葉県社会福祉センター
神奈川●9月29日(土) 午前11:00～午後3:00／よこすか若年期のつどい→県民保健福祉大学
9月30日(日) 午前11:00～午後3:00／若年期本人・家族のつどい→ほっとぽっぽ
富山●9月1日(土) 午後1:00～3:30／てるてるぼうずの会→サンフォルテ2階介護実

習室

静岡●9月15日(土) 午後1:30～3:30／若年のつどい→富士市フランセ東館3階福祉団体活動室→支部に要申込
愛知●9月8日(土) 午後1:30～4:00／元気かい→東海市しあわせ村
滋賀●9月12日(水) 午前10:00～午後2:00／ピアカウンセリング→滋賀県成人病センター職員会館2階
鳥取●9月23日(日) 午前11:00～午後3:00／若年のつどい「にっこりの会」→地域交流センター笑い庵「笑い庵カフェ & マルシェ」

広島●9月1日(土) 午前11:00～午後3:30／陽溜まりの会東部→福山すこやかセンター
9月8日(土) 午前11:00～午後3:30／陽溜まりの会広島→広島市吉島地域福祉センター
9月22日(土・祝) 午前11:00～午後3:30／陽溜まりの会西部→廿日市市あいプラザ
宮崎●9月10日(月) 午前11:00～午後2:00／本人交流会「今日も語ろう会」→宮崎県支部事務所

詳細は各支部まで



一景送信))

青森では8月2日～6日までねぶた祭りです。出番を待つねぶたがずらりと並んでいました。(7月28日、同市内の観光物産館広場で。支部世話人勉強会に出席の帰途)



会員のみなさんお元気ですか。

6月23、24日の土日から始まって7月末までの毎週、「家族の会」のブロック（地域）会議が続いています。全国を7つの地域に分け、その地域内の支部の世話人、会員が集まっての会議です。例年ですと、秋や冬にも分散するのですが、今年は6地域が集中しました。本誌10ページにはその前半、三つの会議の様子が報告されていますのでご覧ください。

この会議のための共通の資料集は本部で作成して、事前に担当の支部に送るのですが、今年は資料作成後に厚労省から、「今後の認知症施策の方向性について」という文書が発表されました。これは大切な文書だと考えて、会議参加者に個別に連絡し各自が印刷して持参してもらうことになりました。

その文書は、藤田政務官を主査として老健局長ら5人の局長、関係課長らで構成された認知症施策検討プロジェクトチームが6月18日に発表したもので、新聞にも報じられました。2月には私もチームのヒヤリングに呼ばれて意見を述べてきたものです。

文書は、冒頭に「これまでの認知症施策を再検証する」「ケアの流れを変える」などの項目があり、私がもっとも注目したのは、「これまでのケアは“危

機”が発生してからの“事

後的な対応”となっていた」「今後目指すべきは“早期・事前的な対応”」の部分です。これは、本欄4月号で紹介した「京都文書」の「認知症の疾病觀を変えることから始める」に通じるものだと思われます。

文書は、その流れを示したうえで、「具体的な対応方策」として「認知症初期集中支援チームの設置」とか「身近型疾患医療センターの整備」とか目新しい言葉を並べています。悪いことではないですが、それは現在の地域包括支援センターを充実すれば出来るのではないか、と言いたくなるようなところもあります。そもそも、どうして「方向について」ではなく「方向性について」って、よくわからない日本語なの?とも。

しかし、私たちが、認知症ケアについて考えると、大切な文書だと思います。ここまでブロック会議では発表されて間もないこともあり、十分な議論はできませんでしたが、今後みんなで検討してゆきたいと思っています。

それでは、また来月まで、がんばってください。
(明日からの関東ブロック会議の前日、7月14日記)
※厚労省の文書は、「家族の会」のホームページで見られます。

2012.7

連絡

- 会員数(個人・団体)9,276名・団体(7月15日現在)
- ホームページ総訪問者数のべ36,335件(6月1日～30日)
- 本誌発行部数25,000部